

議事概要

※第 267 回長期評価部会（令和 5 年 12 月 20 日（水）開催）の議事概要より、以下の公表資料に関する部分を抜粋。

- 日本海側の海域活断層の長期評価―兵庫県北方沖～新潟県上越地方沖―（令和 6 年 8 月版）
- 日本海中部の海域活断層の長期評価（第一版）―近畿地域・北陸地域北方沖―

出席者

部会長	岡村 行信	国立研究開発法人産業技術総合研究所
		地質調査総合センター活断層・火山研究部門名誉リサーチャー
委員	伊藤 弘志	海上保安庁海洋情報部技術・国際課海洋研究室上席研究官
	奥村 晃史	国立大学法人広島大学名誉教授
	佐竹 健治	国立大学法人東京大学地震研究所教授
	宍倉 正展	国立研究開発法人産業技術総合研究所地質調査総合センター連携推進室 国内連携グループ長
	鈴木 康弘	国立大学法人東海国立大学機構名古屋大学減災連携研究センター教授
	都司 嘉宣	四万十市地震・津波対策アドバイザー／国立研究開発法人建築研究所 国際地震工学センター特別客員研究員
	堤 浩之	同志社大学理工学部環境システム学科教授
	西村 卓也	国立大学法人京都大学防災研究所教授
	藤原 広行	国立研究開発法人防災科学技術研究所研究主監 マルチハザードリスク評価研究部門長兼務 先進防災技術連携研究センター長兼務
	堀 高峰	国立研究開発法人海洋研究開発機構海域地震火山部門 地震津波予測研究開発センター長
	山崎 晴雄	首都大学東京（現 東京都立大学）名誉教授
	吉田 康宏	気象庁地磁気観測所長
説明者	吾妻 崇	国立研究開発法人産業技術総合研究所地質調査総合センター 活断層・火山研究部門活断層評価研究グループ主任研究員
	石山 達也	国立大学法人東京大学地震研究所准教授
	岩田 知孝	国立大学法人京都大学防災研究所教授
事務局	郷家 康德	文部科学省研究開発局地震・防災研究課長
	重野 伸昭	文部科学省研究開発局地震・防災研究課地震調査管理官
	佐藤 壮紀	文部科学省研究開発局地震・防災研究課地震調査研究企画官
	岩切 一宏	気象庁地震火山部地震火山技術・調査課調査官
	松尾 健一	国土地理院測地観測センター火山情報活用推進官
	上野、熊谷、木村	（文部科学省 研究開発局地震・防災研究課）

地震予知総合研究振興会※の担当者（以下「振興会」）

※委託事業「地震調査研究推進本部の評価等支援事業」の受託者

—海域活断層評価手法等検討分科会の審議状況について—

事務局（熊谷）：（参考資料 2 に基づき説明）

岡村部会長：ただいまの報告について、ご質問やご意見等あればお願いします。

（意見なし）

議題 2 海域活断層の長期評価について

岡村部会長：海域活断層の長期評価について、事務局より説明いただく。

事務局（熊谷）：（参考資料 5 に基づき説明）

岡村部会長：ただいまの説明について、ご意見やご質問等あればお願いします。

堤委員：参考資料 5 p. 15 において、F-net の発震機構解を用いて、垂直成分のデータから横ずれの平均変位速度に換算するために用いる横ずれ／縦ずれ比を 2.1-11.4 の幅で仮定すると、5 倍くらいの違いになる。日本海南西部の海域活断層はほとんどが横ずれ型ということであるが、平均変位速度も 5 倍くらいの幅で示されていたということか。

岡村部会長：そうである。かなり幅広い平均変位速度を示していた。

堤委員：横ずれと判断されるものについては、この手法を一律に適用したのか。

岡村部会長：そうである。

堤委員：今回の評価対象海域である日本海南東部では逆断層が多く、逆断層（縦ずれ）にプラスして横ずれがある状況だが、横ずれ成分に換算する際の手法は新たに検討するのか。

岡村部会長：今後の議論次第である。少なくとも、横ずれタイプと縦ずれタイプ、あるいはその中間と
いうように幾つかのタイプに分類した上で、横ずれ／縦ずれ比を決めることになるのではないかと
考えている。

堤委員：日本海南東部では逆断層が多いため、反射断面で実際に読めるデータがかなりあると思う。そ
うすると、平均変位速度の幅はかなり狭まってくるということか。

岡村部会長：横ずれ／縦ずれ比の幅が狭まるため、結果として平均変位速度の幅も狭くなると考えてい
る。

堤委員：了解した。

岡村部会長：他にはどうか。

（意見なし）

岡村部会長：日本海南東部の海域活断層の長期評価についてはまだ審議途中であり、これから随時報告
をしていきたい。特にネットスリップの決め方については、議論する必要があると考えている。

以 上